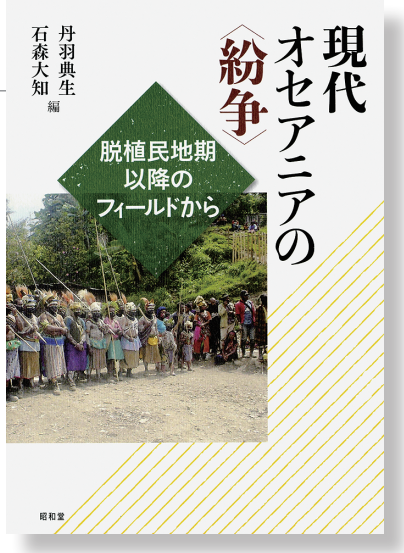
現代オセアニアの＜紛争＞
──脱植民地期以降のフィールドから



丹羽典生・石森大知編
昭和堂／2013 年／本体 3,000 円＋税

＜オセアニアの紛争に関する研究＞

本書は、筆者の科研に基づく研究「オセアニアの紛争に関する文化人類学的研究：フィジー諸島共和国の事例から」と、国立民族学博物館（みんぱく）で主催した共同研究「オセアニアにおける独立期以降の＜紛争＞に関する比較民族誌的研究」の研究成果の一部として出版したものである。

上記の 2 つの研究は、近年増大している第三世界の紛争の特質の一端を解明することを目的としていた。前者がこれまで筆者の主たる調査地であったフィジーにおける民族誌的調査から得られた知見に基づき、そこで起きた紛争を捉えることに力点があるのに対して、後者は、オセアニアという地域的枠組みのなかにおいたときにみえてくる、紛争の特徴に関する比較研究に焦点があった。

こうした研究を立案した経緯には、冷戦以降の第三世界における民族紛争の増加や、低強度紛争という新たな紛争の出現など、大きな意味での戦争形態の変化がしばしば指摘されてきたという時代認識がある。オセアニアにおいても、植民地時代の政治闘争以降の政治的に安定した時期を経て独立をはさみ、1990 年代後半以降、暴動から民族紛争、クーデタまでさまざまな政治的問題が起きている。ところが、その一方で、オセアニアの紛争に関する研究は、ことに日本語という文脈においては、十分なされていないことに、筆者はつねづね問題を感じていたのである。

＜本書の焦点＞

オセアニアの紛争について先行研究がすくなかったことには、理由がある。まず、温暖で美しい海に囲まれた、世俗的な争いとは無縁な風光明媚な環境を備えた、オセアニアという楽園のイメージがあろう。また実際に、飢餓の問題が起きているような国とはことなり、生計維持経済の水準では相対的に豊かな国々である。それ以外としても、国家の総人口 100 万人以下の国が多くある地域であり、そうした規模の点も、紛争などの問題が看過されやすい理由のひとつとして数えられる。そのため、オセアニアの水準では比較的大きな紛争であっても、国際政治学などで下される紛争の定義にはあてはまらないということが起きることになる。いわば、オセアニアの紛争は、みえない政治的問題として存在していたともいえる。

本書では、そこで、オセアニアの政治的問題を、脱植民地期以降という時代的限定を設けた上で、オセアニア各地の現在の政治的状況を明らかにすることに焦点を絞った。執筆者は、そうした意図にあわせて、2000 年以降にフィールド調査を行っている方々を中心に、現地での調査や滞在に際して、近年の政治的変化の影響を受けることが多々あったであろう研究者を選んだ。

＜今後の展望＞

本書を通じて、オセアニアの紛争に関する大まかな見通しを提示することができたと考えている。そこで、今後の展望としては、本書での成果を踏まえた上で、みんぱくの共同研究会参加者各自の調査地における政治的問題に関する分析を提示していただき、それをとりまとめることで、オセアニアの政治的問題についてより深みをもった分析にしたい。

それ以外には、オセアニアという枠を超えた地域間比較と歴史的研究との接合した分析の方向に研究を開いていくことを予定している。

地域間比較については、地域研究コンソーシアムによるワークショップ「現代の紛争をめぐる地域間比較研究に向けて──アフリカとオセアニアの事例から考える」（2012 年 12 月 9 日、藤井真一代表、国立民族学博物館）において部分的に行った。オセアニアのデータを、紛争の事例や研究の豊富なアフリカと比較することで、人類にとって紛争とは何かという、紛争を考える際のより包括的な枠組みについて検討していきたい。

歴史的研究との接合については、国際シンポジウム「グローバル化における紛争と宗教的社会運動──オセアニアにおける共生の技法」（2013 年 1 月 26 日、国立民族学博物館）のかたちで一部行った。世界各地では、植民地化をはじめとする社会変動期に起きた宗教的社会運動と、1980 年代以降のグローバル化の影響を受けて生起している広い意味での宗教的、政治的諸運動との比較研究である。両者を同じ土台の上で比較検討することで、紛争に関する通時的な研究についても引き続き行っていきたいと考えている。

文　丹羽典生

研究戦略センター准教授。専門は社会人類学、オセアニア地域研究。著書に『脱伝統としての開発：フィジー・ラミ運動の歴史人類学』（明石書店 2009 年）、論文に「紛争と政治的混乱：アフリカ化論の批判的検討を通じて」遠藤央ほか編『オセアニア学』（京都大学学術出版会 2009 年）など。